

## OR のルネッサンス

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長 小笠原 暁



明けましておめでとうございます。今年はどうなるのかサッパリ分かりませんが、OR学会にとっては新しい門出の年になって欲しいものです。昨年秋の函館の研究発表会で皆が合意したように、OR学会は単に手法の研究・開発を最終目的とするのではなく、研究の成果を実際の問題に適用して、現実の意味のある解を求めていくことを目的にしなければなりません。街に出てみるとORで解決できるような問題がゴロゴロ転がっているのではないのでしょうか。交通信号一つとっても、スムーズな交通流をもたらしているかどうか、銀行窓口やデパートの歳暮受注のカウンターにできる行列での待ち時間を減らすための考慮がなされているかどうかはなはだ疑問です。こんな身近な問題の他にも、各銀行が知恵を絞っているはずの金融商品の種類が如何に貧しく、また利率が低いか、デフレ対策のために政府が打ち出す政策がどうして決め手を欠くのか等々、ORが攻めていくことができそうな問題が満ちあふれているように思えます。私はORが再び発足当時に戻って、われわれの身近にある諸問題の解決に取り組

む姿勢を鮮明に示すことが必要だと思います。そうあってこそORの存在価値が世の中に再認識され、ORのルネッサンスが現実のものになるでしょう。

最近、学問の境界が狭まり、ORと関係の深い幾つかの学会ができました。狭い範囲でより深く問題追求に当たることは結構なことだと思いますが、同時に現実の問題をあまりにも狭く捉えすぎる恐れなしとしません。私は、ORはかなり骨太に問題を捉えていく学問であり実践であると考えています。だからこそ、われわれのOR学会は「線形計画学会」とか「待ち行列学会」といったような手法別サブ学会を作らずこの40数年を過ごしてきたのではないのでしょうか。問題解決こそがORの命です。できる限りORと関係の深い他の学会との協調関係を保ち、互いに相補いながら現実の問題解決に当たることがこれからのOR学会にとって必要なことだと思います。

会員各位の御健闘を心から願って、年頭の辞とします。